

2020年
9月7日号 No.1580



週刊 教育資料

EDUCATIONAL PUBLIC OPINION <http://www.kyoiku-shiryō.co.jp>

潮流

批評的で論理的な思考を

一般社団法人コミュニケーションスキル協会代表理事

野中アンディ[Ⓔ]



資料

誰一人取り残すことのない「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(中間まとめ骨子案概要)——新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会

CONTENTS

▶ 2 潮流

批評的で論理的な思考を

野中アンディ(一般社団法人コミュニケーションスキル協会代表理事)[Ⓔ]

▶ 5 解説・ニュースの焦点

○「個別最適な学び」の捉え方など整理——教育課程部会

編集部

○女性教員、小62.3%、中43.7%、高32.5%に
編集部

▶ 8 経営改善につながるプログラミング教育

プログラミングを通して学びを確実なものに
山崎智仁(富山大学人間発達科学部附属特別支援学校教諭)

▶ 10 特別企画

感染症を理由とした差別や偏見の防止の呼び掛けは?

▶ 12 校長講話

「日本の四季」「夏休みの意義」を考える講話
山口麻衣(東京都文京区立千駄木小学校校長)

▶ 14 目と身体と脳をつなぐビジョントレーニング

事例③「原始反射」が邪魔をしていた
横田幹雄(一般社団法人日本ビジョントレーニング普及協会理事)

▶ 16 特別資料

令和2年度から令和4年度までの間における
小学校学習指導要領等の特例を定める告示
について(通知)

▶ 19 資料

誰一人取り残すことのない「令和の日本型学校教育」
の構築を目指して(中間まとめ骨子案概要)
新しい時代の初等中等教育の在り方特別部会

▶ 35 教育の危機管理

放射線に対する意識と課題
鬼頭英明(法政大学スポーツ健康学部教授)

▶ 38 向山行雄のドキュメント『学校経営』

変わりつつある運動会の風景

向山行雄(敬愛大学国際学部教授・こども教育学科長、全国連合小学校長会顧問)

▶ 40 玉置崇の学習指導要領 現場での生かし方

「GIGAスクール構想」を理解する^②

玉置 崇(岐阜聖徳学園大学教育学部教授)

▶ 42 変わる教育委員会

変わりゆく「公教育」の位置づけ

松本 眞(兵庫県・尼崎市教育委員会教育長)^①

▶ 43 教育問題法律相談

事故記録の取り方

澤田 稔(弁護士)

▶ 44 通信・議会質疑

感染症対策^②

▶ 46 変わる! 英語教育

英語教育実施状況調査から[Ⓓ]

編集部

▶ 48 BOOK

『主体的・対話的で深い学び』学習評価の手引き』
『対話力』

▶ 49 自著を語る

『現場の負担を減らす 私立学校の労働時間管理』
三ツ星通代(特定社会保険労務士、人事コンサルタント)

▶ 50 元中学校長 浅田局長の文科省日誌

教育実習等の特例措置を決定・公表
田中元首相の母校、中央工学校を視察
浅田和伸(文部科学省総合教育政策局長)

▶ 52 マイオピニオン

いつもいっしょがあたりまえ
木村泰子(大阪市立大空小学校 初代校長)



一般社団法人コミュニケーションスキル協会
代表理事
野中アンディさんに聞く①

潮流

批評的で 論理的な思考を

コミュニケーション学の
学術的背景に基づいて
世界基準のプレゼンテーションの
スキルの普及を目指してきた。

世界基準のコミュニケーションを

今から30年ほど前に、交換留学生としてアメリカの大学に留学し、初めて受講した「パブリック・スピーキング」の授業で、説得力のある話し方の重要性を痛感して、その後、コミュニケーション学について興味を持ち、帰国後に一般企業での勤務を経て、再び渡米。カンザス大学大学院で修士号を取得。更に帰国後、西南学院大学大学院で対人コミュニケーションの研究を深めて博士号の学位を取得したという。

特に、論理と修辞の力はこれからの日本の大学では必須の教育内容になるのではと考え、大学の教員になったが、アメリカと違って日本の大学では必須の科目という位置付けではなく、受講生も限られていた。そこで、思いきって教員を辞めて、その普及のための企業研修をメインとした会社を立ち上げた。そして2018年の8月には、より広く社会人全体を対象にした受講しやすい講座を企画・運営する、一般社団法人コミュニケーションスキル協会(CSA)を設立した。

野中 アメリカの大学では、数学と英語(国語)とパブリック・スピーキング、今の言葉でいえばプレゼンテーションですが、この三つは専門にかかわらず一人

前の大人になるために必須の科目と考えられています。特に「パブリック・スピーキング」は文章を作るための論理と、さまざまな表現のための修辭の二つを工夫しながら原稿を書く術を学ぶというものでした。私にとっては、日本の高校や大学では学んだ経験がないものですが、こうした力を身に付けたいと国際社会では太刀打ちできなくなると痛感しました。

日本でも最近では、さまざまな提案をしたり、学習成果を発表するためのプレゼンテーションの必要性が指摘されるようになってきた。しかし、日本のプレゼンテーションの多くは、資料づくりに時間を割き、当日はそれを読み上げるだけの「朗読会」になっているのでは、と野中さんは見ている。何よりも、プレゼンテーションは単なる提案ではなくて、それを聞く人とのコミュニケーションになっていくことが肝要であり、そのためのスキルを学んでおくことが大切になってくるという。

野中 コミュニケーションスキル協会では、「伝える力」を世界レベルで身に付ける場を提供することを目的に、①1〜3級までのプレゼンテーション講座②対人・組織・異文化間のコミュニケーション③コミュニケーションスキル英会話④プレゼンテーション道場（小学3年以上）

⑤法人研修⑥認定講師の育成—に取り組んでいます。今年から全面実施されている新学習指導要領では、言語能力の確かな育成が強調されており、思考・論理・表現の力の育成に関心のある学校の先生方のための講座なども運営しています。

小・中学生対象の「道場」も

コミュニケーションスキル協会の各種講座などには、現在、オンラインで全国から参加がある。今後、対面講座は現行の関東九州に加え、北海道、東海、近畿地域での開催を計画しているという。Zoomを使ったオンライン講座は2年前から取り組んでおり、小学3年生から中学生までが参加できる「プレゼンテーション道場」もその一つ。

人前で堂々と話すスキルが身に付くとともに、自分の言葉で伝える力を培うというコンセプトだ。初級クラスでは「話すのは自分ではなく聞いてくれる人のため」という意識を持って、①興味深い話題の設定②文章の組み立て／順番③語彙の選択方法④伝達—という流れで、何度も繰り返しながらトレーニングをしていく。上級クラスになると、単なる自己紹介ではなく「もっとこの人と話したい!」と思わせる話し方を学ぶ。「1分プレゼン」では①批評的思考

で論理的展開を理解②自分の情報を最大限に入力③語彙の指導④伝達実践—を、「3分プレゼン」では、①批評的思考で論理的展開を理解②認知的不協和（モヤモヤ）を提示③解決策を示唆④改善された姿を連想—など。講座はオンラインシステムで、自宅からでも受けられる。コロナ禍の現在においては、一つの学びの場として、Zoomによる野中さんのコメントのほか、他の参加者のプレゼンを聞いて、「批評」の力を付けていくというものだ。

野中 現在は小3から中学生までですが、将来は高校生も参加できるようにしたいと思っています。この「道場」の内容は大人向けのCSAプレゼンテーション講座3級の内容を基に30〜40秒で話す訓練をします。さまざまなテーマについて自分の考えを文章にし、それを私が添削して、実際にプレゼンするというトレーニングを、毎週やっています。

この「道場」の活動の中に取り入れているのが、「辞書ゲーム」だ。これは自分が辞書となって、与えられた単語を別の言葉で言い換えるというもので、CSAプレゼンテーション講座では全ての級で大人向けに実施している。その際に、ルールがあり、「状況、状態、もの、こと、様子」で言い換えるのはNGとした。例えば「おまけ」

という言葉葉を「脇役の付加価値」などと表現できると、原稿を作成するときに同じ言葉を使わずに別の表現を工夫する力が付き、結果的に語彙力が身に付く。

野中 この辞書ゲームですが、小学生には難しいかなと思っていました。これは大人対象の講座で実施してきたもので、なるべく抽象名詞を取り上げます。例えば「人生」という言葉を別の表現「生まれてから死ぬまでの物語」などに言い換えることができます。最後が「物語」という名詞で言い換えています。そこに「状態」などNG表現があるとダメというルールです。ある言葉を別の表現で言い換えることで、文章の中に同じ言葉を繰り返すことが少なくなりやすくなります。「道場」でやるときは、参加した子供たちから批評してもらって、「すっかりした」「分かりやすい」などのコメントをもらって、みんなが納得できる言い換えを見つけるようにしています。先日「勉強」をテーマにしたとき、ある小学生は「入試のための大切な授業」と言い換えていました。実際にやってみると、私自身も事前に言い換えた表現を自分で用意しているのですが、時々小学生の言い換えの方が優れていることがあります。「先生、負けたよ」などと言うと、小学生たちは大喜びします。

批評的思考で提案を

プレゼンテーションというと、日本では、学校現場でも、パワーポイントなどのソフトを使って、図やイラストで説明することというイメージを持ちやすい。ところが、アメリカの大学で経験したパブリック・スピーキングでは、こうしたスタイルは毛嫌いされるという。一定の結論が出ているものを説明するだけでは、そこに疑問も出なければ、新しい発想も生まれにくいから。結果として、だまって聞くしかないというのが日本式プレゼンの特徴だ。

野中 私がアメリカの大学で経験したのは、「どんなことであっても、しゃべらないと価値がない」ということです。つまり、だまって聞くのではなく、そこで議論が始まる意見を提供することが重要であり、その議論を通じた新しい知見やアイデアに価値があるということ。日本ではクリティカル・シンキングを「批判的思考」などと訳していますが、私は「批評的思考」と捉えて、良い点もきちんと評価しながら、どうすればよりよい解決ができるかを、相手も納得できるように提案していくことが大切ではないかと思っています。

日本の場合、プレゼンだけではなくて、

一般的な会議などでも、報告された内容を黙って聞くだけというスタイルが多い。批評はせず、結論に従うだけという姿勢では、新しい視点や発想はなかなか生まれにくい。同時に、「道場」など、子供を対象にした講座でも、事前に自分の考えを文章にしておくことを重視しているが、その結果、語彙力だけでなく、論理力も高まり、言葉で読み取ることができるようになった。

野中 先日、「道場」で、自分の名前の由来をテーマに、6人の子供たちにプレゼンしてもらいました。自分の名前の漢字に注目して、どういう意味があり、親がどんな子供に育ててほしいかを表しているのでは、と説明してくれた子供に対して、他の子供から自由に批評する意見が出ていました。辞書ゲームだけでなく、文章に対して論理と修辞の工夫を通して、批評的な思考を鍛えるということは、小学生でも繰り返すことで大人も驚くほど、しっかりした意見を堂々と発表できるようになります。言語能力の確実な育成という新学習指導要領のねらいの実現のために、民間の団体の取組ではありますが、こうした試みがあることを、この機会に広く知っていただきたいと願っています。

一般社団法人コミュニケーションスキル協会
会 || <https://www.commskill.net/>